



## 『関西企業ヒストリア』

～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取り上げ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

### 第19回 創業 1914年(大正3年)

## ペガサスミシン製造 株式会社

### 洋服文化の発展とミシン業の台頭 美馬ミシン商会を創業

**1914年**▶ 明治時代初期、日本は西洋の文明を取り入れることで近代国家に生まれ変わろうとしていました。その代表ともいえる革命的な変化が服装の洋風化です。宮中で礼服が採用されるやいなや、軍人や警官、鉄道員などの制服も洋装に様変わりし、洋服はまたたく間に上・中流階級のシンボルとなり、大正期には一般大衆の間に広く浸透していきました。

洋服需要を呼び水に、明治中期より縫製業は隆盛を極め、並行して工業用ミシンの導入が進み、ドイツ、続いてアメリカから大量に輸入されるようになりました。これらの輸入販売と補修部品製作によるミシン関連産業が台頭し始めました。

明治末期から大正初期にかけて日本のミシン市場を席巻したのは輸入製品でした。工業用の一部はドイツ製で、大部分を米国製が独占。国産化を期待する声は強く、多くの企業家、技術者たちが国産ミシン開発にしのぎを削りました。

創業者である美馬嘉蔵もまた、国産化を悲願とする先駆者の一人でした。1900年、当時世界最大手の米国ミシンメーカーが日本に上陸すると、その日本法人の社員となり、販売に従事しましたが、「この手でミシン国産化を果たしたい」という想いに突き動かされやがて独立。志のままに、1914年1月、大阪で工業用ミシンとその部品の製造販売を生業とする個人経営の美馬ミシン商会を創業しました。

創業の地、大阪市福島区一帯は当時、メリヤスの編み立て、染色、縫製といった一連の工場が集積し、縫製工場では米国ミシンメーカーの1本針オーバーロックミシンを主力機種として使っていました。美馬ミシン商会が最初に

国産化したのは、このミシンに使用するメスや送り歯等の消耗部品でした。高価な輸入品に比べて価格は10分の1程度だったため大好評を博し、取引先も注文数も着実に増え、順調に業績を伸ばしていきました。

一方、軍の被服廠(軍服の生産工場)で使用するミシンは相変わらずの外国製品。このため、工業用ミシンの国産体制は整わず、依然として市場は外国勢に奪われていました。

### オーバーロックミシン 国産第1号開発に成功

**1937年**▶ 1935年中頃には、美馬嘉蔵の後継者となる美馬隆一による生産加工技術の向上と製品の品質改善によって、欧米の輸入部品に劣らない精度と耐久性をもつ各種部品を製作できるようになっていました。

そのため各方面から、「ぜひ、ミシンを開発してほしい」、「国産のオーバーロックミシンはできないか」と期待の声が寄せられ、自社の技術力をもって下請け加工業と目される部品メーカーの立場から脱却し、工業用ミシンの製造に乗り出すことを決意しました。

工業用ミシンは、衣料縫製工場において生産力の基幹となる主力設備であるがゆえ、家庭用ミシンとは比較にならない複雑な機構、高度な機能を有しています。たとえば、1分間の回転数は、家庭用ミシンが800回転前後に対し、当時の工業用ミシンは最高3,000回転にまで及ぶものもありました。しかも、用途別で専門に分類される機種は、およそ3,000種にまで上ります。

メリヤス衣料の需要が際立って増大するとみて、数多くある工業用ミシンの中から、その縫製に最適のオーバーロックミシン(縁かがり縫ミシン)の製品化を決意しました。

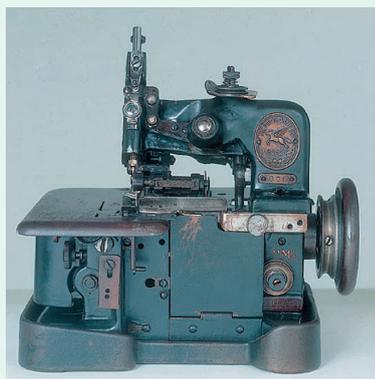
製品化には、高度な技術力と莫大な資金が必要でしたが、すでにクリアできる力は備えていました。社内の技術力は大幅に向上し、世間の高評価が資金調達を支えとなりました。

1936年末、試作にかかるも、未経験ゆえ幾多の悪条件が重なり、思いがけぬ試行錯誤を繰り返しました。技術面でも資金面でも苦境に立たされましたが、翌1937年、ついに国産第1号のオーバーロックミシンの開発に成功しました。美馬ミシン商会が業界で好評を博していた部品類に付けていた魚印のブランドで世に送り出し、さらに国内だけでなく、一部は東南アジアにも輸出されました。

外国製工業用ミシンの毎分 3,000 回転とほぼ同等の性能、しかも回転音は軽く、糸締め、縫い調子、操作性等は外国製品の性能を上回るものでありました。

その後、戦時色が濃くなり、輸入難から国産オーバーロックミシンに対する需要は急増。特に、各種軍装品の縫製用に大量の発注を受けました。わが国の縫製事業は、こうして外国製ミシンへの依存から脱却し、終戦に至るまで、国産ミシンは軍需用衣料の生産に活躍し、大きく貢献することになりました。

需要は増加の一途をたどり、このオーバーロックミシンは



国産第1号のオーバーロックミシン「DC-1型」

現在、飾り縫系を加え工業用ミシンの多くを占める量産機種となっています。この1号機の誕生で、世界有数の工業用ミシン専門メーカーとしての地位を揺るぎないものにしました。



ここが  
転換点

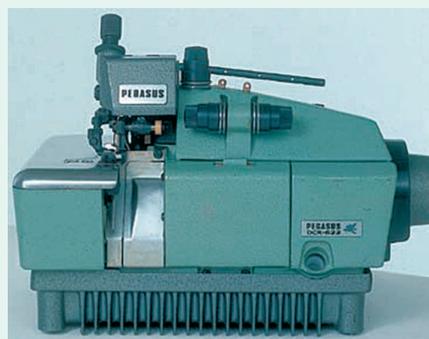
その1 生産体制強化に向けて  
ペガサスミシン製造(株)を設立

**1959年**▶ 美馬ミシン商会を発展させて、1947年、(株)美馬ミシン工業所を設立。その後、1959年には製造部門としてペガサスミシン製造(株)を、販売部門として新たに美馬ミシン(株)を設立。製販分離で、さらに販売戦略を強力に推進。国内のみならず、世界各国に代理店を配置し、50余カ国に輸出市場を拡大しました。

このとき、製造部門として開設したペガサスミシン製造(株)は、主力工場のある大阪市福島区に本社を置きました。資本金は当初の200万円から増資を重ね、1966年10月には

3,150万円へと、7年間でおよそ16倍近くに増加しました。

発足後、工業用ミシンの生産、新技術の研究及び新製品開発は以前にも増して好転し、業績は一層進展しました。1960年に二重環とオーバーロックを同時に縫い上げる省力機「DC-MS型安全縫ミシン」を開発。1963年には、当時の技術では想像もつかない夢の6,500回転という世界的な高性能機「超高速曲針オーバーロックミシンDCR-600型」を開発し、大手企業の基幹工場をはじめ、全協力工場でも採用、導入されました。DCR-600のデザインは著明なインダストリアル・デザイナーが手がけ、工業用ミシンとして初めて通産省からグッドデザイン賞を受けたこともまた製品史上に刻まれる輝かしい出来事となりました。



グッドデザイン賞を受賞した DCR-600

## 世界を視野に入れた 大規模な工場建設を決断

**1968年**▶ 昭和40年代、ペガサスは名実ともに工業用ミシンの国内トップブランドとなっていました。

さらなる国際競争力強化のため、従来にない大規模な新工場建設の計画が立ち上がりました。建設にあたっては、海外のミシン工場を度々視察し、生産効率を向上するシステム化の重要性を強く感じていました。広大な敷地に整然と工場建屋を配置し、所要の協力企業の工場も敷地内に収容する、これにより連携を緊密化して一貫生産体制を実現することを理想としていました。

工場用地の選定にあたって、数ある候補地のうちで、滋賀県水口町の協力により推薦を受けた土地は、立地条件、面積ともに構想に見合うものでした。速やかに決定して協力工場に呼びかけたところ、有力5社が工場進出に賛同し、滋賀水口新工場と関連協力工場の建設へと、一步を踏み出しました。

1968年に第1棟工場・厚生棟(3,780㎡)と第2棟工場(2,700㎡)が完成し、操業を開始。アームベッド素材の投入から、組立完成、梱包出荷まで、一貫生産を目指した本格操業へ着々と整備を重ねていきました。

なお、呼称は、1986年から滋賀工場に変更しております。



ここが  
転換点

## その2 中国進出の本格化で 加速する生産拡大

**1985年**▶ 昭和60年代以降、世界的なファッション産業化の進展によるニーズの変化により輸出は好調に伸び、新製品も売り上げを伸ばしていました。この機に乗じて、東アジアの急速な産業形成の動向を見据え、中国における生産拠点の開設、効率化に向けた生産体制の多様化を積極的に進めていきました。

中国の国営企業は、日本企業と連携を希望していたことから、1985年、当社提案により折半出資、20年期限で天津に「天馬ミシン製造有限公司」を合弁会社として設立。1988年に開業式を行いました。工業用ミシンの製造・販売を行う日中の本格的合弁事業はこれが初めてでした。



天馬ミシン製造の開業式

加えて1994年、中国における第二の生産拠点として、新たに100%出資の「ペガサス(天津)ミシン有限公司」を設立。同社は「天馬ミシン製造有限公司」で生産・販売していない機種を生産し、コストパフォーマンスに優れ、市場競争力を高めたミシンを全世界に送り出すとともに、さらに中国国内での市場を開拓しようとする突破口でもありました。

2001年には、部品工場として「福馬(天津)縫製機械有限公司」を設立。その後、「ペガサス(天津)ミシン有限公司」を存続会社として、2008年に「天馬ミシン製造有限公司」と2010年には「福馬(天津)縫製機械有限公司」と合併しました。

## 100年の歴史を有し、次なる 100年へ未来を切り開いていく

**2014年**▶ 20世紀末から21世紀にかけて、ペガサスミシンは独自性を持つ環縫いミシンで高い世界シェアを獲得。熟達した技術によって、ペガサスの名は内外に知られるようになっていました。

これを機に、販売・サービス拠点の拡充、高品質・高付

加価値の製品を創造、そして世界の需要を踏まえた生産能力の増強を図るために株式上場を目指して、2006年に東証2部上場を果たし、翌2007年には東証1部上場の銘柄指定を受けました。

年々競争が激化する世界市場において、新たな成長エンジンとなる第二の主力事業を育てるべく、2007年に合弁で中国天津市に「天津ペガサス嶋本自動車部品有限公司」を設立。自動車用ダイカスト部品事業に新規参入、自動車用安全ベルトのリトラクター部位の部品を始めとするダイカスト部品の製造・販売を行うこととしました。

2013年には、自動車部品の需要増加に対して、隆盛著しいベトナム ドンナイ省に新たな生産拠点として「PEGASUS SHIMAMOTOAUTOPARTS (VIETNAM) CO., LTD.」を設立、さらに世界市場を展望し2016年には単独出資によりメキシコモンテレイ市に「PEGASUS AUTO PARTS MONTERREY S.A. DE C.V.」を設立しました。その後も高まる製品需要に迅速に対応するため、2021年にはダイカスト事業の4拠点目となる「南通ペガサス自動車部品製造有限公司」を設立、自動車用ダイカスト部品事業は、いまや同社第二の柱となっています。

一世紀にわたり、市場の声に耳を傾け、先進技術の開発にチャレンジを続けてきた同社は、2014年に創業100年を迎えました。

2019年には「世界・地域へ発信する本社」をテーマに新本社ビルも完成。建物外周部には同社を象徴するミシンの縫い目形状のルーバーを設け、地域のランドマークとして企業のアイデンティティを発信する創りとしています。

創業以来100年を超えて育まれてきたジャパンプランドの誇りを胸に、全社一丸となって“ペガサス”というブランド力を高め、これからもペガサスミシン製造はお客様皆様に満足していただける製品を届けてまいります。



新本社ビル

### ペガサスミシン製造 株式会社

本社所在地：大阪府大阪市福島区鷺洲 5-7-2

従業員数：1,281名(連結) 資本金：22億5,555万円

事業内容：工業用ミシンの開発・製造・販売、ダイカスト部品の製造・販売